

台湾の木彫芸術について

頼 永興*・上原一明

A study on modern wood carving in Taiwan

LAI Yun-hsin, UEHARA Kazuaki

(Received September 28, 2012)

はじめに

本文は台湾の木彫芸術について、美術史的観点からその発展の過程を述べる。まず台湾の地理と歴史について概略的に紹介し、木彫と関係が深い台湾森林の発展の説明と、台湾現代アートの先駆者である黄土水を台湾木彫芸術転換期の代表者として紹介する。そして、三義の木彫が台湾木彫産業の重鎮として、戦後の寺廟建築と木彫工芸輸出の隆盛と共に、台湾木彫の発展の基礎を築いたことを述べる。三義木彫博物館の努力と影響、裕隆汽車による「裕隆木彫創新奨」の設立や、70年代の郷土運動と共に朱銘の木彫が知られるようになった事や、民主化以降の主な木彫作家の紹介及び、技法や造形と新しい木彫芸術の可能性について述べる。木彫師、先住民、美術系大学など三つの分野で活躍する現代の台湾木彫芸術家を数名紹介する。日本と欧米の留学経験者の帰国による海外からの影響、美術大学の木彫教育の整備による美術系大学派の木彫芸術も近年活発になってきた状況や、台湾在住の外国籍木彫家の台湾の現代木彫に対する影響力について、そして台湾木彫の未来の展望について述べる。

1. 台湾の歴史と森林資源

台湾は中国大陸の東南海上、そして日本と東南アジアの間に位置し、文字で記録されている最初の年代は1624年であるというのが一般的に認識されている。しかし、考古学の発掘によると、台東県で発掘された長浜文化遺跡の調査では、約5万年の歴史を持つ旧石器時代のものが出土したと発表された。台湾の先住民は、約5千年前に移動してきた南島民族と判断されている。17世紀の前半にはオランダとスペインに局地的に占領された。その後、絶えず外来民族に占領される運命にあった。1662年、明朝の遺臣・鄭成功がオランダ人を追出し、台湾経営を開始したが、1683年に清朝に帰順した。清の統治による福建省と広東省沿岸の移民が大量に台湾へと移住し、本格的な開発が始まった。1895年の日清戦争の敗戦賠償として、台湾は日本に割譲された。その後日本政府が台湾を植民地として経営し、50年間で経済や文化面で台湾近代化の基礎をなした。第二次世界大戦後に中華民国が台湾を接管、独裁的に台湾を統治した。蒋介石率いる国民党政府及び中国35省の兵士と、共に疎開してきた様々な業種の人々が台湾に新しい社会を形成した。1987年に戒厳令解除となり、総統選挙が1996年から民選が開始され、本格的な民主社会へと発展した。

台湾は国土面積約3万6千平方キロの70%が山地であり、森林に覆われている。かつて台

*台湾・国立台湾芸術大学

湾には桧や牛樟、樺など彫刻に適している材木を大量に育てていた。しかし、現在では長期間の伐採、過度な開発と天然災害の為、原生林はほとんど残っていない。中華民国行政院内政部農業委員会林務局が、1990年10月19日に行政院台農字三〇四三〇号令「台湾林業経営管理方針」を公表し、その第八条「禁闕原始林令」を林務局が翌年1991年11月より実施した。その後も乱墾、盗伐及び台風による災害で大量の巨木が失われた。たびたび台風の来襲により山奥から大量の流木が流出している。林務局が河原や海岸に漂着の桧や樺、牛樟などのような一級材を回収するが、その他の大部分は民間に流用されている。それにより、台湾の木彫芸術家が上質な材木を使うことが可能となった。しかし、現在の台湾木彫芸術家の使用している木材は、成長の早い樟が半数以上を占め、他は流木や輸入材でまかなっている。

2. 台湾近代彫刻の先駆者

1895年、日清戦争で清朝が敗戦したため、台湾は日本に割譲された。日本植民地の時代（1895年-1945年）の美術教育は、台湾美術の啓蒙的時代であったと考えられる。当時の美術の主流は絵画であったが、最初に東京美術学校（現・東京芸術大学）へ留学した黄土水（1895年～1903年）は木彫出身であった。東京美術学校へ入学する前の作品「李鉄拐」や「牡丹花」は、黄氏が台湾の伝統木彫家から影響を受けた伝統木彫的な作品であった。しかし、彼は学校の本科と研究科の7年間、彫刻科の木彫部で学んでいたが、後に木彫から塑造に専念した。生涯にわたり、また「帝国美術展覧会」に4回入選した作品はすべて塑造であった。さらに38歳という若さで亡くなったため、彼は台湾の現代木彫に対する直接的影響は比較的低いと考えられる。しかし、伝統木彫から現代木彫に変わる代表的な人物であることは間違いない。それは1926年彼の在学中の木彫作品「鯉」、「猪」、「牛頭」、「鷺鳥」などの作品から、入学前の作品と比較すると技法は冴えてはいるが、装飾性や置換性の強い性質は日本の伝統木彫に影響されたと考えなければならない。黄土水は台湾近代芸術の第一人者と位置づけられ、日本において西洋の影響を受けたが、自身のルーツを忘れることなく、故郷の南国のシンボルである水牛を取り上げ、それを創作の主題として自分の存在を確かめていたと考えられる。彼は確実に伝統木彫から一歩踏み出した先駆者といえる。

3. 三義の木彫産業

台湾は植民地時代から日本と深い関係があったため、木彫産業にも大きな影響を受けた。それは日本への輸出の為に、伐採され残った木の切り株を利用し、鷹や虎、装飾家具、達磨や弥勒菩薩、そして天狗のお面や欄間彫りの下請けまでこなしていた。かつての苗栗県三義郷周辺は、樟の原生林であった。清朝後半から植民地時期にかけ、樟脳産出の為に多く切り倒されたため、切り株の産地となり、生産工場や木彫師がここに集中した。このような事業は1960年代から70年代まで盛んであったが、その後、木の切り株の減少や、1970年代のオイルショックにより日本への輸出も減少し、木彫産業も次第に衰退してきた。しかし、自治体の強い介入で木彫を地方産業として観光産業と連動させた。その後、1982年高速道路三義インターチェンジ開通と共に、三義木彫街を旧市街から高速道路のインターチェンジ周辺に移動させた。その後、景気と交通事情の改善により、木彫産業も輸出向けから国内市場向けへと変化した。1990年代には、一部の木彫産業が中国とベトナムに進出し、安い人件費と材料で作った製品が逆輸入され、台湾の木彫産業界に多大なダメージを与えた。

しかしその後、1995年の三義木彫博物館の落成に伴い、地方規模の展覧会から国際的な展

覧会まで開催し、コンクールも毎年開催することにより、現在では年間の来館者は約30万人に及んでいる。入館通路の両脇も木彫製品の店を設けさせ、産官学とも多角的木彫事業を推進している。地元の大手自動車企業・裕隆汽車も地方へのフィードバックとして、1996年から木彫コンクール「裕隆木彫金賞」を主催している。現在の金賞賞金は、苗栗県文化局が1992年から主催する「台湾国際木彫芸術競賽」の金賞賞金より20万元高額の80万元となっている。このような高額賞金の木彫芸術コンクールの出現によって、国内外の木彫家の登竜門となり、そしてそれが木彫家の励みにもなっている。これにより全体的に木彫人口が増加している。現在では徒弟制度は不可能であるため、美術系大学で木彫家の人材を育てるしか方法がないのが現状である。安い木彫工芸品を作る木彫職人ではなく、独自の特色を持つ木彫芸術家が育たなければならない。時代の流れと共に民衆の意識も高まり、鑑賞する目も次第にレベルが高くなっていったため、民衆の要望に答えられるような木彫芸術品を作ることが求められるようになった。そして、店頭で陳列してある作品の性質も作者不明の工芸品から、作家による芸術品に変わらなければならない傾向にある。これから消費意識の変化により、木彫芸術の作家の需要も増加すると予想される。

4. 木彫師と現在の取り組み

明朝と清朝の時代に、中国福建省と広東省から多くの漢民族が墾拓のために台湾へ移住して来た。当時の木彫といえば、守り神である媽祖像に代表される神仏像と、寺院や一部の民家の建築に付属する彫刻だと考えられる。中国の福建省と広東省沿岸から木彫師が招致され、台湾で寺院の装飾彫刻や神仏像を作り、一部の師匠が台湾に定住した。彼らは弟子を取り、やがて木彫の技術が台湾に定着した。後に台湾風の伝統木彫が盛んに作られ、その技術は戦後しばらくの間、日本の伝統木彫産業の下請けにも貢献した。欄間や仏像、そして樟や桧の切り株を利用した虎や鷹のような工芸品製作も盛んに作られ、1960年代から70年代に最盛期を迎えた。しかし、次第に材料調達が困難になると共に、建築方式の変更による木彫品の需要が減少する一方、1980年代から中国との経済交流が解放されたことにより、現在では発注が大陸へ流れてしまっているという状況にある。仕事を失った多くの木彫師は転業することを選択したが、一部の木彫師達は彫る仕事を継続した。更にその中の数十人が現代木彫にも挑戦し、現在では台湾現代木彫の主要メンバーとなっている。

以前、台湾で木彫師になるには弟子入りが必要であり、3年4ヶ月の修業を経てから一人前と認められるようになる。しかし、現在三義地区の木彫師の中の最年少者が既に41歳となっている。その後の後継者は皆無であると言っても過言ではない。1999年に三義木彫協会が成立し、その会員は約65名であった。2002年には台湾木彫協会が成立し、その会員は約50名であり、多くの会員は両方に所属している。会員の大部分は三義地区に居住し、一部の会員は台湾各地に分散している。彼らは力を合わせ、木彫産業存続のために努力している。

台湾木彫協会の創会理事長・楊永在が、2009年に中華文化総会の円卓会議の会前会議で台湾の木彫産業が直面している問題について「産業の空洞化、木彫師の高齢化、伝承の断絶化、市場の萎縮化と著作権問題」などの問題を提議し、政府にその取扱いを重視してもらいたいとした。しかしこのような現状は、世界経済と社会状況の変化によるものだが、木材の減少と後継者不足も主な要因だと考えられる。百名にも満たない木彫師達は現在も懸命に創作し、工芸から芸術への道を勇敢に踏み出している。現在活躍している木彫師は、写実的な女性や周りの人間を彫り出す戴堯燦（1971年～）、主に花をモチーフに制作する曾安国（1968年～）、宇宙

生物のような造形を作り出す陳義郎（1968年～）、漁師やお寺の前で休憩する郷土人物を作る陳正雄（1942年～）などが取り上げられる。

木彫市場が三義に集中するため、伝統木彫や現代創作に関わらず、作品が良ければすぐ売却される。三義にある三百数十軒の木彫関係の店は、問屋街のように毎年100万人近い観光客が訪れるため、大きな商機となっている。しかし、ほとんどの店頭で販売している作品の90%以上が中国製という危険性はあるが、転機と捉えることも出来る。この問題の解決のためには、新しい木彫家を育てることが望ましいと考えられ、後継者の育成のため、三義木彫博物館が2006年から4回にわたり「木彫芸術薪伝営」を開催した。その年の夏休みに、大学で木彫を専攻している学生を十数名程度募集し、地元の木彫師の指導で、それぞれ提出した模型を4週間で完成する創作キャンプである。住み込みによる規律正しい作業時間による生活は、大学生活とは異なる学習経験となる。教師を担当する木彫師達も、学生から新しい発想を得ることが出来る。双方の接触で、大学と地方の架け橋を形成し、後継者の問題を解決しようという試みである。2011年の暮れには、大葉大学木彫専攻の卒業生と大学院修了生の二名が三義に参加している。これは非常に画期的なことである。しかし、後に後者は辞退したが、前者が木彫師産業に参入した。これは「木彫芸術薪伝営」が、ひとつの大きな成果を表した事例である。芸術的要素と現代的デザインが、三義木彫の未来に欠かせない要素だと考えられ、それを可能にするのは若い世代である事が期待される。

5. 先住民の木彫

台湾には、現代木彫芸術がある以前に、既に先住民と漢民族の木彫がこの土地に存在していた。先住民の木彫は建築や生活道具に施され、造形は質素でプリミティブ的な要素を持っている。蘭嶼島のタオ族が飛び魚漁に使うタタラ船は、洗練かつ優雅な造形を備えている。これは現在でも作られ実用されており、その施された模様は船の造形と非常に調和している。またパイワン族の木造穀倉の表面には、人間と蛇の模様が彫刻されている。祖霊を大事にする彼らは、祖先とされる蛇の模様をよく使用している。それがパイワン族木彫の特徴といえる。パイワン族は先住民の中でも木彫を得意としている民族で、またそれらは彼らの生活の一部となっている。彼らは樹木に魂が宿っていると信じ、樹木を大事にしてきた。

近年、台風の来襲と共に多くの樹木が流木となり、山奥から流れ出している。大量の流木を利用するために各地方自治体や政府の林務局が、流木創作シンポジウムを開催するようになっている。参加メンバーには必ず先住民の木彫家が選出されている。彼らは頻繁に自身の部落の物語や生活の一場面を作品にする。しかし、彼らの作品は特徴が強く識別され易い。彼らの作品はプリミティブな要素が強く、また多種多様な現代の機械道具を使用しているため、大部分の作品の特色は類似している。彼らは外部の彫刻様式に興味を持たず、プライドを持って創作している。代表的作家は、現材木の持つ力を大事にするアミ族のラヒック・タリフ（1962年～）、先住民の人物をモチーフとするシキ・ソフィ（1966年～）、先住民の生活道具をモチーフに創作するニーダン・ダッゲイバーリィ（1978年～）、抽象的有機物体をモチーフとする女性芸術家ルビ・スワナ（1959年～）などが挙げられる。

6. 民主化以降の主な木彫作家

1996年3月の大統領直接選挙で、民意による総統選出から幕を開けた台湾の本格的な民主化は、まさに新しい台湾のスタートの年であった。筆者（上原）が台湾へ渡った最初の年でもあ

り、民主化の始まりは台湾芸術界にも新たな時代の幕開けともなった。行政院文化建設委員会（文化庁に相当）による文化芸術方面に対する予算の執行や、貿易やIT産業などのビジネスで成功を収めた大企業による企業メセナも活発化し始めた。画廊経営も盛んとなり、多くの美術品が売買され、市場が拡大された。彫刻分野に関しては、石彫やブロンズ像による現代彫刻作品の制作が主流であり、木彫による作品制作は主に伝統的な木彫に限られていた。

当時、台北市とその周辺を結ぶ「捷運（MRT）」が建設されており、主要な駅周辺にパブリック・アートが大々的に公募されていた。多くの彫刻家の作品が採用され、様々な素材の彫刻作品が設置された。必然的に大型の彫刻となるため、その大部分はブロンズや石彫、ステンレスによる作品が採用された。パブリック・アート作品の性格上、大型且つ野外に設置されるため、木彫による作品は皆無であった。当時の現代木彫作家は数える程しかいなかった。以下代表的な木彫家を紹介する。

当時、既に台湾の芸術界では、朱銘（1938年～）が活躍していた。1970年代の台湾で、「郷土運動」が文学や芸術のジャンルで取り上げられていたが、流れに乗り活躍した木彫芸術の代表者として挙げられるのが彼である。彼は本来木彫師であり、青年時代は主に神仏像や工芸品を作っていた。しかし彼はそれだけでは満足できず、30歳の頃、台湾現代彫刻の大家である楊英風（1926年～1997年）に師事し、現代アートについて学んだ。1968年、自身の妻をモデルにした作品「玩砂の女孩」は、彼が最初に発表した非伝統的な木彫作品だとされている。この作品は写実的な表現で、彼のアカデミックへの憧れが窺える。しかしその後、水牛が多くの材木を積む牛車を急斜面で力強く引く「同心協力」シリーズを作り出し、「台湾農民は水牛のように」という勤勉精神を表現した。いわば郷土的題材をみつけ、郷土運動の波に乗ったといわれている。しかし後の「太極」シリーズをみると、朱銘が太極拳を学びながら、太極拳の真意はポーズではなく、動きの中にあると悟り、太極拳拳法の中に載っていない動きをチェーンソーを使って切り刻んだ。初期の「太極」作品は人間の形を容易に読み取る事が出来るが、作品に彫られた人間の形は、徐々に抽象化し、禅意を感じさせる作品となってきた。同時に「人間」シリーズも作られた。このシリーズの作品は、円空仏の木っ端仏や特有の彫り方と木材の扱い方に影響を受けたと考えられる。郷土運動の波に乗ったという言い方よりも、実は彼自信の研究と修業で積み重ねた成果だと考えられる。これらの創作シリーズはもちろん木彫で表現していたが、その一部は発泡スチロールを鋸やチェーンソーで形を削り出し、その原型をブロンズに置き換え、木彫芸術の表現方法を拡大出来るようにした。これにより、作品の大きさと材質の耐久性の問題を一挙に解決した。更に木彫作品について言えば、朱銘は木工芸品を大量生産するため、チェーンソーを使って荒彫りする技を作品に応用し、在来の木彫より力強く表現出来るようになった。このような特色を持つ事で彼の作風を確立し、台湾の木彫芸術に大きな影響を与えた。

蕭長正（1954年～）は、国立台湾芸術専科学校（現・国立台湾芸術大学）で彫刻を学んだ後、フランスのパリ第八大学造型芸術学科に留学した。台湾に帰国後、金宝山事業機構芸術顧問となり彫刻公園の設計や、中国・桂林愚自樂園彫刻公園の芸術総監を経て、上海の月湖彫刻公園を手掛けた。現在は、主に中国大陸に渡り活躍している。彼の木彫は、原木の存在感をうまく生かし、木が持つ本来の量感や質感をあえて造形することなく、抽象的に表現している。やはりその造形センスには、近代ヨーロッパ彫刻の理念と傾向が反映している。彼は木彫だけではなく、石彫やインテリア・デザイン及び建築設計もこなす。

蕭一（1956年～2006年）は、台湾南部の屏東で伝統彫刻を学んだ後、創作的な作品を発表した。

彼のダイナミックで荒々しい木彫表現は、木の材質感を通して人間の存在感を表している。彼もまた朱銘の影響を受けた木彫家の一人である。日本の仏像にも関心を持ち、円空の造仏精神に傾倒した。いわゆる鈍彫りで作品を制作し、木材の「芯」の材質的要素と仏像の造形的要素、そして仏教の精神的要素を作品化した。

独学で木彫技法を身に付けた韓旭東（1939年～）は、台湾大学の人類学科を卒業した異色の木彫家で、具象的人物木彫作品はヒューマニスティックな表現形態である。人物の背景にある人生観や精神性も感ぜられる表現方法であり、台湾でかなり注目されている。

吳榮賜（1948年～）は、福州の伝統木彫の名師・傅潘徳に師事し、青年期から頭角を現した。29歳で工房を独立し、創作木彫制作へと展開した。彼は優れた中国伝統の木彫技術を駆使し、仏像や道教の神像、現代の肖像彫刻に至るまで多くの作品を手掛ける。三国志演技をモチーフにしたシリーズや、筋肉質な人間や怪鳥を象った作品は圧倒的な動きやスピード感が感じられる。近年は、ニュージーランドや中国福建省などから巨大な木彫の制作の依頼を受けるなど、国内外で活躍している。

7. 台湾の美術系大学

台湾の大学では、木彫の授業を設けている所は数校程しかない。比較的設備の整った木彫コースを設けている大学は、国立台湾芸術大学の彫刻科と大葉大学の造形芸術学科がある。国立台北芸術大学の美術学科と長栄大学の美術学科では、二年生と三年生に選択履修科目として木彫を設けている。このアカデミックな木彫教育は、国立台湾芸術大学の前身である国立台湾芸術専科学校から開始された。1964年に伝統木彫の大家・黄亀理が彫刻科に迎えられ、木彫授業を展開してきた。黄氏の授業は、伝統模様の板彫りを中心に教授された。後継者の王慶台も伝統彫刻の伝承を引き継ぎ、2000年ごろ王氏が古跡修復学科に異動したため、約10年間、木彫授業は非常勤講師によって継続された。2009年から筆者（頼）が木彫授業を引き受け、通常の丸彫り木彫授業を始めた。

1996年には大葉大学に造形芸術学科が設立され、金沢美術工芸大学大学院で木彫を専攻していた林漢鼎（1949年～2010年）が、十数年間木彫を指導していた。2009年には林氏の転職の為、日本籍の吉田敦（1967年～）を迎えた。植物が無限に成長していく作品を制作していた林氏は翌年亡くなり、台湾の美術系大学派の木彫家が更に減少した。大葉大学の造形芸術学科は工房制を取っており、学生は三年生から各専攻別工房に入る。創作に専念出来るというこのシステムは、同校で徹底的に実践されている。

1982年に設立された台北芸術大学では、蔡根（1950年～）が木彫を指導した。蔡氏はインスタレーションの作家で材木や合板を自在に操り、学生には自由表現の世界を指導した。同校の初期の卒業生・楊北辰（1970年～）がスペインの留学から帰国し、2004年から2008年の間、長栄大学で木彫を指導するようになったが、数年間で数名の優秀な木彫家を育成した。楊氏は、使い古しの靴や手袋などを非常にリアルに作り、更に油絵の具で着色を施す作品を制作している。彼は一時期専業作家になっていたが、教育熱心であったため2010年から国立台湾芸術大学彫刻科の客座教授になっている。

このように美術系大学で木彫教育を受け、卒業してから木彫を続けている者は、教える程しかないというのが現状である。しかし近年、若手の卒業生の中から木彫で作品制作を発表する者が現れてきた。注目される者には、台北芸術大学出身の董明晋と台湾芸術大学出身の黄品彤、そして大葉大学大学院を修了した林志航と孫玉佳などが挙げられる。彼らの登場により、

これから木彫専攻を選択する学生が増える事が期待される。

8. 外国籍の木彫家

現在、台湾に数名の外国籍木彫芸術家が定住している。イギリスの伝統木彫と現代木彫を得意とするマーティン・バラット (Martyn Barratt 1965年～) は、イギリス籍で台湾の女性と結婚し、現在台湾の木彫界で活躍している。アイスランド籍のシグユグリ・ソーダーソン (Sigurgeri Thordarson 1948年～) は抽象的造形を制作する木彫作家で、修行僧のように作品を造形し、表面を気がすむまで磨き上げる。大葉大学で木彫を指導している日本籍の吉田敦は、日本の多摩美術大学で木彫を専攻し、また中国北京の中央美術学院での留学経験も積んでいる。彼は現在、人と地球、宇宙とのつながりをテーマに創作している。スペイン籍のサルバドール・マルコ (Salvador Marco 1970年～) は、台湾で数回の木彫シンポジウムに参加し、2012年から本格的に台湾で作家活動を始める決意をした。彼の作品は洗練された造形力と素材を十分に生かした表面処理で成り立っている。彼ら外国籍作家の活躍は台湾の木彫家だけではなく、芸術界全体にとって良い影響を与えるといえる。また一方では、彼ら外国籍彫刻芸術家にとっても、台湾での作家活動の生存環境は相当有利であるといえる。また彼らの参入によって、台湾の木彫芸術が一層豊かになると思われる。

まとめ

台湾の木彫芸術の歴史はまだ浅いが、材木の豊富さと中国や日本そして欧米からの影響を受け、しかも木彫家の出身も先住民や木彫師、美術系大学と外国籍作家と、人材が非常に豊富である。このような状況において木彫芸術の発展は大いに期待できるといえる。更に、台湾人は木材を生活の中に取り入れる事を好む民族であり、政府の文化政策や企業の大きな支持の下、現在の台湾は木彫芸術が発展する最適の時期を迎えたといえるであろう。前文で論じたように、台湾の木彫産業は工芸が大部分を占めているが、木彫芸術の分野はまだ発展途上であるため、このバランスをうまく取らなければならない。これまで、芸術コンクールにおいて、木彫作品はよく「工芸的要素が強い」と指摘されていたようであるが、近年になって作品全体の芸術的質の高まりと表現の多様化によって、これからの台湾木彫芸術の発展が期待される。

参考文献：

- 李欽賢 鄭水萍 1994年「雄獅美術1994-7－黄土水百年誕辰記念」雄獅美術
潘煊 1999年「種活芸術的種子-朱銘芸術観 Ju Ming on Art」天下文化
張富峻 薛淑麗 2007年「木彫家銘録(一)「三義地区」調査報告」苗栗県国際観光文化局
陳奕煌総編集 2011年「2011建国百年国際木彫芸術活動-成果專輯」
行政院農業委員会林務局東勢林区管理处

付記：本稿は、頼の文を基調とし、全体を上原がまとめた。